

神奈川

高層ビルの谷間を空中散歩しながら目的地へ。2020年の東京五輪・パラリンピックを控えて、横浜・みなとみらい21 (MM21) 地区一帯の交通アクセスとしてロープウエーの復活が構想されている。横浜市の「移動自体が楽しく感じられるような多彩な交通サービス」の提案募集で2件のプランが採用され、それぞれ事業化へ向けて動き出した。

横浜港振興協会を代表とする共同体は、横浜駅東口を起点にMM21地区、大さん橋周辺を經由して山下ふ頭に至る延長約6キロのルートを提案した。同協会が指定管理者の一員になっている大さん橋は近年、クルーズ客船の入港が急増。山下ふ頭はカジノを含む統合型リゾート(IR)の有力候補地とされ、観光地としての飛躍が見込まれる。

MM21地区の新港地区で遊園地「よこはまコスモワールド」と大観覧車「コスモクロック21」を運営する泉陽興業(本社・大阪市)が提案したのは、JR根岸線桜木町駅周辺と新港地区を結ぶルート。現在、新港地区へのメインルートとなっている海上の遊歩道「汽車道」沿いに、延長約600メートルのロープウエーを設けることを検討している。

MM21地区では開発が始まる前の1989年に横浜博覧会が開催され、会場へのアクセスとしてロープウエーを運行した実績がある。当時地元法人だった横浜そごう、東京索道(東京都千代田区)などが共同出資した「横浜博スカイウェイ」が事業主体となり、国の事業許可を得て、横浜そごう2階デッキから会場まで延長約770メートルの索道を敷設した。

華やかなパピリオンを見下ろしながら会場入りできる「非日常性」が評判を呼び、190日余りの会期中に約305万人が乗車したが、博覧会閉幕とともに営業を終了した。横浜博覧会はバブル経済期の「地方ブーム」の代表例とされ、入場者総数は1,330万人を突破。このうち4分の1弱がロープウエーを利用したことになる。

約30年もたってロープウエーの復活が構想されているのは、MM21地区を含む横浜市の都心臨海部はJR、地下鉄、市営バスなど基幹的な交通網は整備されているものの、最寄り駅から海側へのアクセスに課題を抱えているからだ。ロープウエーは鉄道と違い、大掛かりな用地買収をしなくても索道を敷設でき



遊園地や大観覧車がある新港地区。手前に向かって細く伸びるのが汽車道

MM21地区に ロープウエー復活へ

るメリットがある。

MM21地区自体も開発が最終局面に差しかり、新たな交通アクセスが必要とされている。2017年末で開発済み、建設中、計画中を合わせた「本格利用地」は約83%となり、年間来街者数は約7,900万人、就業者数は約10万5,000人を記録。今後、大学や音楽アリーナ、複数のホテルなども建設されることになっている。

20年の東京五輪・パラリンピックを控えて、MM21地区の来街者数はさらに増加が見込まれる。そこで横浜市は17年10月、公費負担を伴わない形での「多彩な交通サービス」の提案を事業者から募集。ロープウエー2案を含む合計9案を採用し、18年に入ってから包括連携協定を順次締結し、具体的な協議を始めた。

整備・運営費は提案した事業者が負担し、市は関係機関や地元住民らとの調整・許認可手続きの支援などを行うことで、事業のスピードアップが図られるという。高層ビルの谷間に浮かぶロープウエーは、想像するだけでも楽しい。アーバンリゾートを目指すMM21地区の新たな観光資源としても、早期実現が待たれている。